

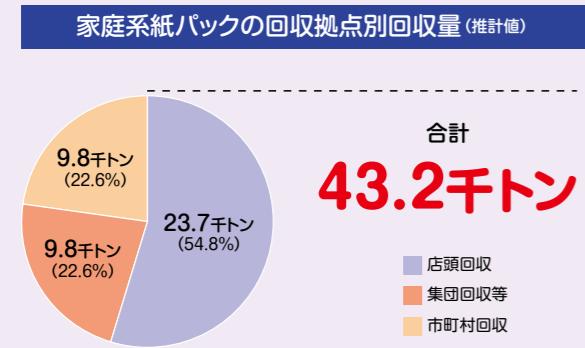
小売事業者のリサイクル状況

スーパーマーケットなどの
店頭回収ボックスで多くの紙パックが
回収されています。

家庭からの紙パック回収の50%以上を占めているのが
スーパーマーケットなどの店頭に設置された回収ボックス
からの回収です。

店頭回収の調査は、生活協同組合やスーパーマーケット各社の公表データ、および独自アンケート調査で行っています。2024年度におけるこれらの合計値は23.7千トンで、前年度より1.0千トン減少しました。家庭系に占める店頭回収の比率は54.8%で、前年度から1.0ポイント低下しました。

なお、小売形態の変化に合わせて、一部のドラッグストアやコンビニエンスストアについても調査を行っています。



取り組んでいます! リサイクル

京阪百貨店守口店

(大阪府守口市)

取組事例 京阪百貨店守口店での食育イベントを通じて、容環協では紙パックのリサイクルについて啓発するとともに、同店で実施している紙パックリサイクル活動について取材を行いました。

京阪百貨店は、「すがたも心もきれいな百貨店」というブランドメッセージを掲げ、京阪沿線を中心に大阪府内5店舗で営業しています。京阪モール内の店舗を除き、京阪百貨店では資源回収ボックスを設置して紙パックなどの資源を回収しています。守口店では紙パックのほか、PETボトル、プラスチックトレー、アルミ缶、廃食用油など家庭で不要になった資源を回収しています。(注:廃食用油のみ、写真と異なる場所で回収しています)

回収ボックスは店舗の屋外に設置され、駐車場に面した市道沿いにあるため容易に見つけることができ、買い物の前後にいつでも手軽に利用できます。いつごろから活用されているのかははっきりしませんが、長年にわたり地域住民の皆さんに親しまれ、きれいに使われてきました。2024年に表面のペンキを塗りなおし、より使いやすく清潔な印象になりました。2024年度には約1.2トンの紙パックを回収し、大阪府内の古紙問屋に引き渡しました。集められた紙パックは再生紙の原料に使われます。



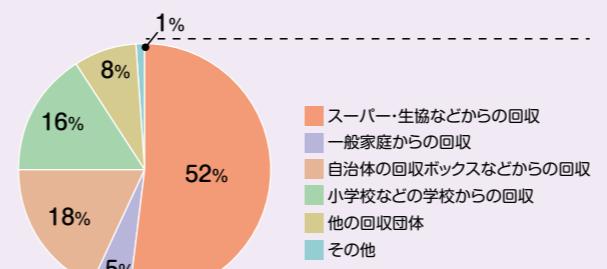
福祉施設のリサイクル状況

福祉施設の回収先は
多岐にわたっています。

福祉施設の回収先は、スーパーマーケットなどの店頭回収ボックスが多いほか、一般家庭、小学校などの学校、自治体の回収ボックスなどと多岐にわたっています。

また、多くの施設では、回収・受け入れした紙パックを主に回収業者に引き渡しています。

福祉施設の紙パック回収量に占める回収先割合



取り組んでいます! リサイクル

社会福祉法人 東京都手をつなぐ育成会 高田馬場福祉作業所

(東京都新宿区)

取組事例 社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会は、昭和36年に知的障害児の教育・福祉・労働・医療等の制度や施策の向上を願い活動していた東京都内の親の会の連合体として発足しました。各地域の親の会との連携のもと民営授産、グループホームの前身である生活寮の運営等、障害のある人に必要なサービスを制度に先駆けて展開し、現在は直営・指定管理を含め、63拠点を運営しています。

同会の事業所の一つである高田馬場福祉作業所は、区からの業務委託を受け、平成17年に事業を開始して以来、地域の中で働く喜びと、より豊かな生活を提供できるよう、利用者一人ひとりの能力や障害に応じた支援を行っています。自立を支える作業の一つとして紙パックを素材にした商品を制作しており、手書きはがきやコースター、メッセージカード、祝箸(袋部分)など、多種多様な商品を手掛けています。中でも、紙パックからパルプを取り出し小さくちぎってパックに詰めた、廃食用油を吸い取るパックが特に人気があるとのことでした。どの商品も魅力にあふれ、細部まで丁寧に作られている点が印象的でした。これらの商品は、地域のイベントや併設のカフェ「まりそる」にて販売しています。地域に根付いた活動の一つとして、今後も継続して取り組まれていくことを感じました。



市町村回収・集団回収の状況

捨てるなんてもったいない!



9割の自治体が紙パック回収に取り組んでいます。

市町村回収や集団回収で14.1千トンの紙パックが回収されました。

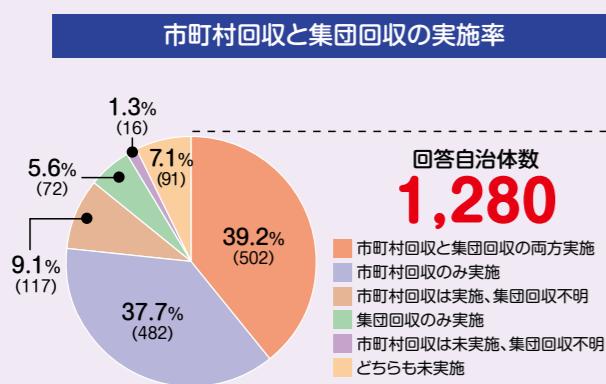
紙パックの市町村回収は分別収集方式や拠点回収方式で実施されています。

2024年度調査は全国の1,741市区町村を対象に実施し、1,280市区町村から回答を得ました。回答人口比率は日本全体の90.2%でした。

調査では、市区町村や一部事務組合などが行う収集を「市町村回収」、住民団体による自主的な回収を「集団回収」としています。

市区町村数で見たとき、市町村回収実施率と、市区町村登録の集団回収実施率は前年度とほぼ同じで、市町村回収が86.0%、集団回収実施率は50.0%^{*}でした。市町村回収と集団回収の少なくとも一方を実施しているのは91.6%で、全国の9割の自治体で紙パックの回収に取り組んでいることになります。

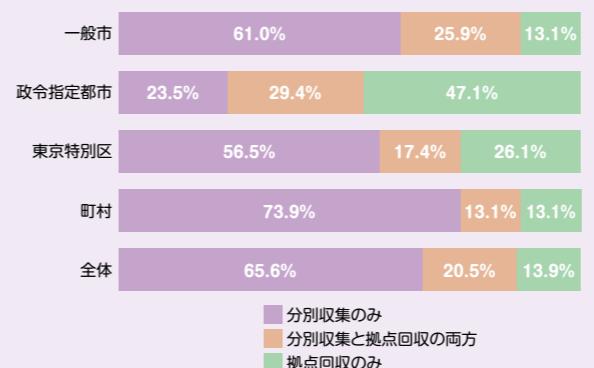
*集団回収実施率=(市町村回収と集団回収を両方実施+集団回収のみ実施)/[回答自治体数-(市町村回収実施・集団回収不明の自治体数+市町村回収未実施・集団回収不明の自治体数)]=(502+72)/(1280-(117+16))=50.0%



都市類型別の市町村回収・集団回収推計回収量

	全体	一般市	政令指定都市	東京特別区	町村
市町村回収					
推計量(千トン)	9.8	7.2	0.7	0.6	1.3
都市類型別回収推計量比率	100%	74%	7%	6%	13%
一人あたりの回収量(g)	78	93	24	63	122
集団回収					
推計量(千トン)	4.3	3.0	0.8	0.1	0.3
都市類型別回収推計量比率	100%	70%	20%	3%	7%
一人あたりの回収量(g)	34	39	30	15	28
合計					
推計量(千トン)	14.1	10.2	1.5	0.8	1.5
都市類型別回収推計量比率	100%	73%	11%	5%	11%
一人あたりの回収量(g)	113	132	55	79	150
都市類型別人口(百万人)	113	69	27	10	7

都市類型別・回収方式の比率



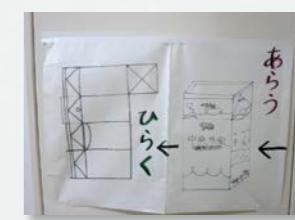
取り組んでいます! リサイクル
愛知県豊橋市

取組事例

豊橋市は、愛知県の東南端に位置しており、東を静岡県に接し、南は太平洋、西は三河湾に面した人口約36万人の中核市です。豊橋市では、牛乳パック等は古紙として地域資源回収やリサイクルステーションなどで回収しており、令和6年度の回収量は約51トンでした。また、地域資源回収の活性化やリサイクルを推進するため、小中学校PTAなどの実施団体に奨励金を交付しています。

豊橋市では、学校給食に使用する牛乳を、令和5年9月に瓶から紙パックに変更しました。これに伴い、学校現場で牛乳紙パックのリサイクルを開始し、ごみの減量化や、資源の循環利用、学校における環境教育の推進につなげました。検討段階では、学校現場における負担の増加や、乳アレルギーの児童生徒への配慮など様々な課題がありました。しかし、先進市の視察を行い、学校と教育委員会で協議を重ねた結果、現在の方法を確立することができました。リサイクルの基本的な流れは、給食を食べ終わった子どもたちが自ら紙パックを開封し、洗浄および乾燥を行います。各学校では、在籍する児童生徒数や手洗い場の状況などをふまえて、自らの学校に最も合うように工夫を凝らして実施しています。リサイクル実績は令和5年9月からの2年間で約97トンとなり、約54万個のトイレットロールヘリサイクルされました。

今後も530(ゴミゼロ)運動発祥の地として環境に配慮したまちづくりを推進していきます。



開き方の掲示



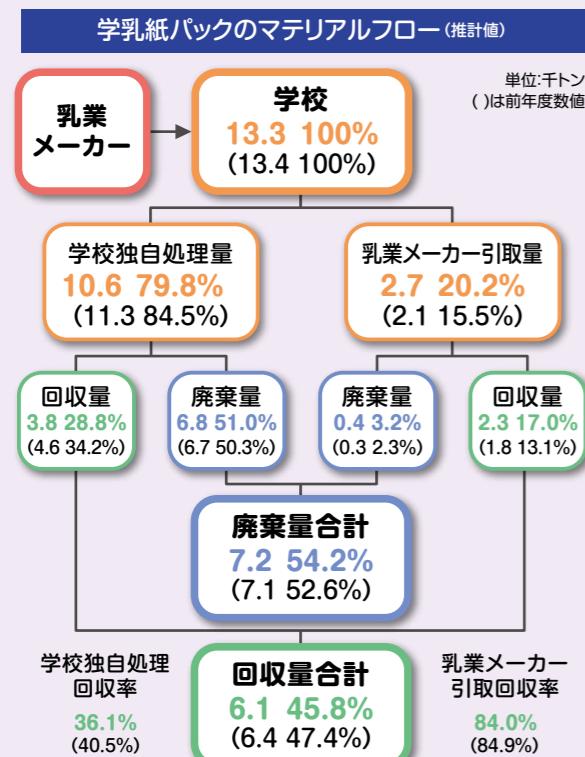
洗浄後の牛乳パックを乾かす工夫

学校のリサイクル状況

学校給食用牛乳の紙パックのリサイクル率はやや低下しました。

2024年度に学校給食用牛乳として供給された紙パックの総量は13.3千トンで、前年度より0.1千トン減少しました。そのうちリサイクルのために回収された紙パックは6.1千トン、回収率は45.8%で、供給されたうちの半分以上が廃棄されている状況です。回収量と回収率はともに前年度を下回りました。学校独自処理回収率は前年度に比べて4.4ポイント低下しています。

コロナ禍で一時的に中止していたリサイクル活動を再開する動きも一部では見られていますが、引き続き可燃ごみとして処理する小学校もあり、コロナ禍前の状況にまでは戻っていないようです。学校生活での日常が戻りつつあるなかで、いかに回収を進めるかが課題になっています。また、びんから紙パックへと容器の切り替えを検討する際には、適切に回収・リサイクルされる仕組みづくりも含めて検討することが必要です。



※学校独自処理とは、乳業メーカーが引き取るのではなく、学校が直接自治体や古紙回収業者などに引き渡すことを指します。

※四捨五入しているため、合計と一致しない箇所があります。

取り組んでいます! リサイクル 神奈川県 横浜市立豊岡小学校

取組事例

横浜市立豊岡小学校はJR鶴見駅から延びる豊岡商店街を抜けてすぐのところに立地し、100年を超える歴史があります。2024年1月、環境協同組合は同校にて紙パックリサイクル向上を目的に紙すきはがきづくりを含めた出前授業を実施しました。

今回、出前授業後の活動と給食用牛乳パック(学乳パック)のリサイクル状況の確認を目的に再訪しました。

出前授業では、担当教諭と児童代表に紙すきはがきづくりを体験していただきました。その後、総合的な学習の時間を使い、家庭から持ち寄った紙パックからパルプを取り出すところから取り組み、全員が紙すきはがきづくりに挑戦し、人力によるパルプ攪拌や、アイロンではなく自然乾燥も取り入れるなど試行錯誤を重ね、はがきを使って授業参観の案内を保護者に届けることができたことが取材を通じて確認できました。

担当教諭のお話では、横浜市の小学校は少なくとも20年前から継続して学乳パックリサイクルに取り組んでおり、コロナ禍でも開くところまで児童が行き、後の作業は教職員がフォローされていたとのことです。今回は6年生を取りました。飲み終わった牛乳パックを手早く開いてカゴに集め、当番がまとめて手洗い場で押し洗いした後、CDラックを流用し、立てかけて乾燥する一連の作業は創意工夫もあり、とても洗練されていました。

取材を通じて「学び合い 高め合い まちとともに明日を拓く豊岡っ子」という学校教育目標がまさに実践されているよう目の当たりにし、頼もしく思いました。



製紙メーカーのリサイクル状況

回収された紙パックは良質なパルプ繊維として再生されています。

取り組んでいます! リサイクル 日本製紙グループ

(東京都千代田区)

(取材先)日本製紙クレシア(株)東京工場 埼玉県草加市松江4-2-16

取組事例

日本製紙グループは、森林資源を育成し、それを最大限に利用し様々な製品を生産しています。液体紙容器事業には1965年に進出、近年、使い捨てプラスチック削減が世界的な課題となる中、環境配慮型製品の一つとしてストローレス紙パック(School POP[®])を開発し、全国で採用が拡大しています。

紙製品は、従来より再生紙や新聞紙、段ボールなどにリサイクルされていますが、紙パックは、特に高品質なバージンパルプを用いていることから、市場で回収される紙パック以外に製造工程で発生する工程損紙を日本製紙クレシア東京工場で、「scottie[®]」をはじめとするティッシュペーパーやトイレットロールの原料用再生パルプとしてグループ全体で有効利用しています。付随して発生するポリエチレンフィルムも、RPF(固体燃料)に再生。ボイラー燃料として再利用し、無駄のないリサイクルを行っています。

また、日本製紙クレシアは2024年より埼玉県草加市内でティッシュ空き箱リサイクル実証実験を開始、回収空き箱をグループ内で段ボール原料として再利用しています。グループ会社のシナジーを最大限に活用し、日本製紙グループの掲げる、森林資源の循環、木質資源の循環、積極的な製品リサイクルの3つの循環の更なる拡大にこれからも積極的に取り組んでいきます。



リサイクル製品への利用状況

